

日本近信

(一月四日)

▲頤書と意見書を提出する

社寺の上地を還附



間の山

(後編) 六四八 中里生

再び

火の手を

擧げ其の運動

は益々猛烈に燃ゆ

て其の先は米友を中心とし

て見物の二かたまりが思うやう

に崩れないのが、餘程懶に觸つ

たと見ゆる物をもいはす其のを

押し潰し散らしたから、見物

のあはての方は非常なもので

ました。

可哀相に、其のあたしに夜店を

出しておひしたる。屋は、此のあ

ふを食つて、煮立ておひた汁

のあはての方は非常なもので

ました。

燒きかけておひた汁を載せた屋

を引継返されてしまひます。

それで、遠慮すれば、その外を通

飛んで、其のが煙火の落ちて來

たやうに亭主の火から混亂した

見物の頭上に落ちて、來ましにか

ら、それを破つたものは大火

が云ひながら頭や顔を押へて苦

しがつて轉が廻りました。

「ア」

が云ひながら頭や顔を押へて苦

しがつて轉が廻りました。

一體、此の頭の米友は、殿様と

意氣地なくも、それお通りだ、

わざいだ時は米友の姿はもう見

られました。

ホー

</div

